

巻頭言

— ERの机の上に一冊 —

「異物除去のマニュアル本」を出版しようと考えた理由は、この領域の特徴として、対処法を知っているか知らないかで診療の経過に大きな差があり、かつ適切な指導が得られないことが多い領域であると、痛感しているからです。

例えば、ネイルガンで脛骨に打ち込まれた釘を抜くときの注意点、直腸に挿入された巨大な人参やコーラ瓶を抜くコツ、血管内へ迷走したカテーテル断端を除去する方法を知っている上級医は稀です。そして、正しい対処が行われれば外来レベルで迅速に解決され帰宅可能となる一方、そうでないとオタオタする医者に患者は振り回されます。

その対処法の伝達には、文章だけで理解させることは困難で、具体的なハウツーのわかるビジュアル本が必須です。そして「この一冊にすべてが網羅されている」ことが便利です。すべてが網羅され、ビジュアルでわかりやすい、こんな本が欲しかった！と、喜んでいただくのが本書を編纂した目的です。

内容としては、一般的な救急施設において、研修医やプライマリ・ケアの医師が知っておくべき基礎的な異物除去の知識と手技から、通常は専門医以外は行わないものまでも記載しています。

項目としては、消化管異物として、食道異物、胃内異物、小腸異物、直腸異物、呼吸器では、咽喉頭、口腔から気管支まで、そして、皮下・爪下異物、骨内異物、耳内異物、鼻内異物、眼内異物、膈内・泌尿器異物、血管・心腔内異物、までを網羅しました。

手技の解説は写真を多用し、わかりづらいところは図で解説するなど、除去の方法が具体的にわかるようにし、多様な状況にも対処できるように異物の質による対応の差や複数の手法、上手くいかない場合の次の方法までも記載しています。

また、基本的な手技の解説以外に「状況の評価や考え方」「リスクマネジメント」「do not」「常識の嘘や変遷」から「失敗して、苦勞して、やっと成功！」というような攻略法や苦勞話も入っています。その他にも、除去後の説明や管理のしかた、他科紹介の判断までも含めました。

執筆者としては、現場で活躍中のベテランの先生に書いていただき、各執筆者の経験談やコツやノウハウ、注意点もコラムとして掲載しています。ベテランのこういう話はさまざまなケースに対応できるように非常に参考になります。

こういった書物は意外にありません。全国のERやICUに本書が一冊置かれ、日常の臨床に役立つことが夢です。ぜひとも設置をお願いします。

2016年9月

野崎徳洲会病院救急科救急センター長
千代孝夫